



TITLE:

アトピー患者の病因帰属にみる素
人の知識の位置づけー医学的知識
・言説との比較からー(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

駒田, 安紀

CITATION:

駒田, 安紀. アトピー患者の病因帰属にみる素人の知識の位置づけー医学的知識・言説との比較からー. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-07-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19938>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-03-23に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	駒田 安紀
論文題目	アトピー患者の病因帰属にみる素人の知識の位置づけ —医学的知識・言説との比較から—		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、アトピー患者の病因帰属の仕方をインタビューから明らかにし、(1)アトピーの病因に関する医学的知識、および (2)アトピーの病因に関する新聞記事の言説、との共通点・相違点を探ることで、患者の持つ「素人の知識」（lay knowledge）の位置づけを考察するものである。</p> <p>第 1 章では、アトピー性皮膚炎という病いの歴史と日本への導入、現在の日本における疫学的な動向を確認し、アトピーを取り巻く問題を紹介している。特に成人患者の有症率が高いことや成人に重症患者が比較的多いことを指摘するとともに、ステロイドの使用をめぐる混乱や、それに端を発したアトピービジネスが社会問題となった状況を描いている。</p> <p>第 2 章では、患者の病因帰属を包含するものとして、「素人の知識」の概念の歴史と定義を明らかにしている。ここでは、1980 年代以降、専門職の知識と素人の知識とは隔たりがなくなりつつある傾向にあることと、1980年頃から現在に至るまでの素人の知識を扱った実証的な研究の中では、メンタルヘルスやがん、糖尿病などの慢性疾患が対象とされてきたことが指摘されている。</p> <p>第 3 章では、素人の知識と対比するため、最新のアトピー性皮膚炎ガイドラインから医学的知識を抜粋・紹介し、続く第 4 章では新聞記事の言説を分析している。海外紙との比較から、日本ではアトピーという概念が普及した状況が特異的であることを指摘するとともに、アトピーの病因に関する新聞記事の言説は、食生活病因説から生活・環境病因説へと移り変わってきていること、また食生活病因説は患者ではなく、マスメディアによって構築された可能性があることを明るみに出している。</p> <p>第 5 章では、申請者自身の調査研究が報告されている。アトピー患者が実際にどのような素人の知識を有しているのか、どのような病因帰属を行っているのかを、インタビュー調査によって明らかにしている。具体的には、ある患者団体のセミナー参加者を起点としてスノーボールサンプリングにより募った 12 名のアトピー患者に対して 聴き取り調査を行い、病因帰属についての語りを Weiner の帰属理論を援用して分析している。ここでは、食生活や環境、遺伝、体質など15 にわたる病因帰属の仕方が見出されるとともに、子どもの頃からアトピーを持っている患者は、自分のアトピーをコントロールできないと考える傾向なども明らかにされている。</p>			

第 6 章では、第 5 章で見出されたアトピー患者の素人の知識を、第 3 章で得られた医学的知識や、第 4 章で得られた新聞記事の言説と比較し、共通点・相違点を探っている。その結果、素人の知識による病因帰属は、標準治療で提唱されている医学的ガイドラインと部分的に一致していた。特に環境、洗剤、化粧品、衣服、汗などの外的かつ直接的な病因については、素人の知識と医学的知識が重なっていた。しかし、それ以外の病因については患者によって解釈もさまざまであり、ガイドラインと表現は似ていても内容が異なるものがあった。さらに、母親の妊娠中の生活、薬の副作用、超自然的な考え方や、患者が所属している患者団体の考え方が大きく影響していることを明らかにしている。

こうした結果に対して、素人の知識が医学的ガイドラインと部分的に一致していたのは、医師やメディアから取り入れた知識が自身の経験によって一定程度裏付けられたため、逆に一致していなかった背景としては、まだ医学的にも病因が明確に判明していないことや、ガイドラインが基本的に軽症の患者を想定しているためではないか、といった考察を行っている。

すなわち、本調査の協力者は比較的重症かつ長年患っているアトピー患者であり、ステロイドを使っても効果がなかった経験を持つなど、標準治療で唱えられている説だけで自身の症状をうまく説明できず、それゆえ民間療法や代替医療、もしくは患者団体が提唱する治療法などに依拠し、最も納得のできる理論を形作っているのではないかというのである。

こうした分析を踏まえて、結論として、医師をはじめとする専門職は患者らの個別性に寄り添い、語りを受容的に受け取る重要性を提唱している。最後に、本研究の限界として、質的インタビューを中心に据えたため、より一般化しうる量的データを得ることができなかったことなどを挙げている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、アトピー患者の病因帰属の仕方をインタビューから明らかにし、アトピーの病因に関する医学的知識や新聞記事の言説と患者らの「素人の知識」とを比較し、その共通点・相違点を探ることによって、アトピー患者の「素人の知識」の位置づけを明らかにすることを試みたものである。

病因帰属は、対象となる集団や、社会階層の文化や知を反映するものとして、病気に伴う患者の行動（病気行動）や病いに対する責任意識などに関連するものとして重視されている。実際、イギリスやアメリカにおける医療社会学では、疾病構造の変化や予防医学の推進、医師患者関係の改善などを背景として、慢性疾患の病因帰属を中心に据えた実証的な研究が数多くあり、今や一つの研究領域を成すまでに至ったことを申請者は先行研究のレビューから明らかにしている。そして、その中には専門家の知識と素人の知識との対比を行っている研究もいくつか報告されている（第2章）。

本研究の新規性として評価できる点は、①日本におけるアトピーという病いに焦点を当てたこと、②新聞記事の言説についても分析を行ったこと、③インタビュー協力者の語りに対してWeinerの理論を援用して分析を行ったこと、である。

①アトピーは世界中に見られる病いであるが、他の国々では日本ほど社会問題化している状況はない。日本では1990年代、アトピーにおける成人患者の増加・重症化と、ステロイド使用に関する賛否、そしてそれに端を発するアトピービジネスの高まりが問題視された経緯があり、さまざまな関係者の意見がマスメディアをにぎわしてきた。医学的なガイドラインに沿ってステロイド治療を行う患者もいる一方で、患者団体独自の考えに沿った治療を行う患者も見られる。このように、医学的に病因が明らかでない状況を考えれば、患者の病因帰属を探ることは、(A)医学的な知識との対比の中で彼らがどのように病因を理解している、また(B)患者らが人生の中で病いをどのように意味付けているのかという点を解明する上で非常に意義深い。本調査では、これらの両側面に該当するリアルな語りが報告されている。

②アトピーの原因や治療については、多くの情報がマスメディア上を飛び交い、患者に少なからぬ影響を与えている。申請者は、専門家の知識だけでなく、マスメディア上の言説との対比によって、患者らの素人の知識がいかに形成されているのかを探ろうとした。その結果、医学的な知識には当てはまらないが、マスメディアの影響を受けていると考えられる多数の語りが見出された。

③患者の病因帰属は内的か・外的かという一次元的な評価が多かった先行研究に対して、Weinerはこれを発展させ（内的／外的、安定／不安定、統制可能／統制不可能）という三次元での分類を提案している。申請者もWeinerの帰属理論を用いてより詳細な次元での分析を行っているが、その結果、子どもの頃からアトピーを患っている患者の方が、自身のアトピー症状を統制不可能であると考えていることなどが明らかとなった。

さらに、12名の協力者の語りから見出された15の病因帰属と、医学的ガイドラインとを比較考察した結果、環境や洗剤、化粧品などの外的な病因帰属はガイドラインと共通していたが、ガイドラインに見られない病因帰属も数多く聴取された。

本研究は、社会問題化しているアトピーの慢性疾患について、いまだに素人の知識と専門家の知識には乖離があることを指摘した点において、素人の知識に関する一連の研究に一つの貢献を成したものと言えよう。さらに日本社会においてはマスメディアの影響によって、諸外国では焦点の当てられていないアトピーという病いが、社会的に構築された特別な意味付けを持たせられていることを示唆した点も評価できる。

アトピー以外の多くの病いにおいて、病因帰属はこれまで患者の病気行動と関連するものとして論じられてきた経緯があるが、それとは対照的に、アトピーに関する人文社会科学的研究では、アトピーに関する諸々の言説に着目した研究以外、患者の苦悩を描き出したものなどが希少である。申請者の行った研究の成果は、患者自身の病因帰属の仕方に着目するという新たな観点から、アトピー患者の病気行動を理解する方向性を切り開くものと言えよう。

ただし、本研究で導かれた「医師は患者らの個別的な語りを受容するように」との結論については、非医学的な説明をする患者の語りを拒もうとする多くの医師たちを説得し得るとは限らない。西洋の患者団体は、情報検索などにより、積極的に医学的知識を勉強して、医師に近づこうとする傾向があるのに対して、日本のアトピー患者は、医学的知識をそれほど重視しない点は興味深いが、だからと言って直ちに医師の側が患者に接近した方が良いということにはならないはずである。言い換えれば、「素人専門家」と現代医学の分断を取り除く責務が医療者の方にあるという結論は、経験論に基づくものなのか、それとも異文化論に基づくものなのか、その根拠に若干の曖昧さが残る。

そうした課題は残るものの、マスメディアで盛んに取り上げられてきた経緯が、アトピー特有の事情を形成していることを示した点において、本研究は、今後の医師の患者への関わり方について重要な問題提起を行ったものと見ることができる。またアトピーという病いに対して新しい角度から分析と考察を試みた斬新な研究として評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年5月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降